

シベリア抑留の思い出

新潟県 星野 菊太郎

私は新潟県石打上野に生を受け、昭和十九（一九四四）年十二月憂国至誠やみ難く現役志願として軍隊に、東部二三部隊に入隊、数日後朝鮮會寧第七五連隊第二機関銃中隊に編入され、防衛任務に当たる。

二十年八月九日ソ連軍参戦と同時に我が陣地にソ連の飛行機からビラ数枚が撒かれた。日本軍無条件降伏であった。満州凶們付近で終戦迎え、ひたすら祖国の勝利を確信し尽忠報国の赤心に燃える若兵にとって、まさに晴天霹靂たる痛恨事であった。

その後延吉に集結してソ連軍門下にて一か月余りの行軍をし、シベリアのイバラン地区に到着した。待っていたのは苛酷な作業であった。寒さに

震えながらの伐採作業でした。ノルマに強いられ続け、その上馬を使い木材の運搬です。その後今度は穴掘りでした。土は掘るものと思いますが、どこでも一面凍り、つるはし等使えず、火を燃やして土が溶けると掘り、一日のノルマはとても無理でした。

監督付きで毎日ノルマが大変でした。

毎日配給される食糧は馬鈴薯ポテトとトウモロコシの粉、黒パン、コウリヤンが少量。多数の同胞、栄養失調に倒れる。昨夜言葉を交わした友も朝には物言わない姿に変わり果て、後日友数人で泥棒を計画、馬鈴薯を頂きに行く。帰りに警備の兵隊に見付かり、射殺された友、名前も分らないまま。三〇一分所、転所後はノミ、シラミ、南京虫等により伝染病にかかり多くの者が他界した。皆様に合掌。

その後手足が不自由となり、松の木の葉を煎じて飲んだ。これも生きるが為の精いっぱい知恵でした。三〇一分所三年目以降、はがきを出すこ

とが許され、家族への思いを託して、いつの日か祖国日本へ帰る日を夢見て毎日苦しい苛酷なシベリアの生活に耐えた。

待ちに待った日がきました。二十四年八月三日、帰国は名優丸にて帰りました。列車のお客さんの中に知っていた人が乗っていました。そこで「只今帰って来ました」。その客は驚き、よくまあ帰ってきたね、と元気な姿を見て驚き、早速みんなに知らせなくてはと、電車が止まると足早に改札を出る。待っていた村の人たちでした。挨拶も言葉にならず涙が止まらなかった。

シベリア抑留の思い出

新潟県 小出 定平

昭和二十(一九四五)年一月朝鮮会寧部隊第一機関銃中隊に入隊、毎日山城山に軍事訓練を受け一期検閲修了。戦時編制を組み、第一小隊第一分

隊に編入(小隊長飯島、分隊長金沢)ソ連国境に近い山中に入り毎日ハッパをかけて穴掘り陣地構築。

昭和二十年八月十五日陣地より下山し、大隊全員集合終戦を知らされたのが八月十七日昼ころである。急な話でこれからどうなるのか。食欲はなく一同涙も出なくて、立ちすくむだけ。それから大隊長引率の元に毎日毎日歩いてトモンに着き武装解除を受けた。その数日後また歩いてカントンに集結。テント暮らし一カ月くらい後に編制を組み、また毎日野宿をしながら歩きソ連領地の小高い丘にてしばらく野宿。

それから貨車に乗せられてコムソモリスクでダンプカーに乗り、着いた所が荒れ果てた三〇一収容所、落ち着いたところで炊事の手伝い。舎内当番(後で医務室の故野村先生と一緒に)、体調が良くなり二級になって外の作業に出される(建築小隊高橋さん)。最後の作業はエポロン駅で基礎から一階部分を終わり二階部分にかかったころ二